



長野氏は「楽しくなければ学校じゃない」と言う。これに反して、いじめを隠蔽し、いじめの子への効果のない指導を平気で繰り返し、その結果、いじめられている子どもを自殺にまで追い詰めてしま

う学校の姿を氏は弾劾する。氏は述べる。いじめにあつて苦しんでいるのなら逃げてしまえばいい。いじめが多様化している今は、昔ながらの精神論では子どもは救えない。子どもが「逃げたい」と言ったら、「大きくなってしまつたいじめはなくなる」という前提に立つて、手助けしてあげてほしい。氏は、塾が学校と比べていじめが少ないことについて、①目的意識が明確、②生徒同士が一緒にいる時間が短い、③学力格差が小さい、④少人数制のため、先生が生徒個人を把握している



長野雅弘 著  
1296円 パンローリング(株)  
☎03-5386-7391

いじめからは夢を持って逃げましょう!  
「逃げる」は、恥ずかしくない「最高の戦略」

という理由を挙げている。しかし、学校はその逆だと言う。評者は考える。このようなある意味「いじめ」が大いにありうる学校教育において、「いじめなどない」と強弁するのは無茶な話だ。それによって、氏が指摘するように小さいいじめが積み取られずに、重大事態に陥っていく。そして、いざことが起こると、建前

的な効果のない対応が繰り返される。努力や頑張りが無駄に積み重ねられるのだ。この傾向は、今の子どもたちにも感じられる。現実社会では、自己の充実にとって有益、社会的に有用というような「効果」が問われるのに、学校では、主観的な「頑張り」が偏重される。意味のない頑張りはやめて、いじめ解消のための転校も含め、自由になつて実効性のある対策をとることによって、「楽しくなければ学校じゃない」という「学校の姿」を取り戻せるのかもしれない。  
(聖徳大学教授・西村美東士)